

真宗聖教全書(三經七祖部) 浄土論註下卷:不虛作住持功德 (331)発表 原稿 #1.

既に種種の法を知らば、復云何ぞ分別する所無しと言ふや。答曰。諸法の種種の相、皆幻化の如し。然に幻化の象・馬、長き頸・鼻・手・足の異なること无きにあらざれども、智者之を觀るに豈に定で象・馬之を分別すること有りと言むや。

▶何者か莊嚴大衆功德成就、偈に天人不動衆清淨智海生と言へるが故にと。何者か莊嚴上首功德成就、偈に如須彌山王勝妙无過者と言へるが故にと。(解説:92)

何者か莊嚴主功德成就、偈に「天人丈夫衆 恭敬繞瞻仰」と言へるが故にと。

何者か莊嚴不虛作住持功德成就、偈に「觀佛本願力 遇无空過者 能令速満足 功德大寶海」と言へるが故にと。

不虛作住持功德成就は、蓋し是れ阿彌陀如來の本願力なり。

いま當に略して虚作の相の住持能はざるを示して、用て彼の不虛作住持の義を顯すべし。人、漚(さん)を輟(とど)止也貞劣反 めて士を養い、或は舟の中に豊(きん)起すこと有り、金を積みて庫に盈(み)てれども餓死を免れず。斯(かく)の如きの事、目に觸に皆是なり。得て得を作(な)すに非ず、在て在るを守にあらざること、皆虚妄の業をして作(な)して住持すること能はずになり。

言ふ所の不虛作住持は、本と法藏菩薩の四十八願と、今日の阿彌陀如來の自在神力とに依るなり。願以て力を成ず、力以て願に就く。願徒然ならず、力虚設ならず、力願相符ふて畢竟じて差はざるが故に成就と曰ふ。

▶ 即ち彼の佛を見せば未證淨心の菩薩畢竟じて平等法身を得證して、淨心の菩薩と上地の諸の菩薩と畢竟じて同じく寂滅平等を得しむるが故なり。(解説:95)

「平等法身」は、八地已上の法性生身の菩薩なり。「寂滅平等」は、即ち此の法身の菩薩の所證の寂滅平等の法なり。(332) 此の寂滅平等の法を得るを以ての故に、名て平等法身と爲す。平等法身の菩薩の所得以ての故に、名て寂滅平等の法と爲すなり。

此の菩薩報生三昧を得て、三昧の神力を以て、能く一處にして、一念一時に十方世界に遍じて、種種に一切諸佛及び諸佛の大會衆海を供養し、能く无量世界の佛法僧ましまさぬ處に於て、種種に示現し種種に一切衆生を教化し度脱して常に佛事を作せども、初より往來の想・供養の想・度脱の想無し。是の故に此の身を名て平等法身と爲す、此の法を名て寂滅平等の法と爲するなり。

「未證淨心の菩薩」は初地已上七地已還の諸の菩薩なり。此の菩薩亦能く身を現じて、若しは百若しは千、若しは万若しは億、若しは百千万億の无佛の國土に佛事を施作す。要ず作心を須みて三昧に入る、乃ち能く作心せざるには非ず。作心を以ての故に名づけて未得淨心と爲す。

此の菩薩安樂浄土に生ぜむと願て即ち阿彌陀佛を見たてまつる、阿彌陀佛を見たてまつる時、上地の諸の菩薩と畢竟じて身等しく法等し。龍樹菩薩・婆藪槃頭菩薩の輩ら、彼に生と願ずるは、當に此が爲なるべしのみと。

問曰。『十地經』を案ずるに、菩薩の進趣階級漸く无量の功勳有りて多くの劫數を逕ふ、然かふして後に乃し此を得。云何が阿彌陀佛を見たてまつる時、畢竟じて上地の諸の菩薩と身等しく法等しきや。

答曰。「畢竟」と言ふは未だ即等と言ふにはあらざるなり、畢竟じてこの等しきことを失はざるが故

に等と言ふならくのみと。

問曰。若し即ち等しからずば、復何を待ちてか菩薩と言ふ。但初地に登れば以て漸く増進して自然に當に佛と等しかるべし。何ぞ假に上地の菩薩と等しと言はむや。

答曰。菩薩七地の中に於て大寂滅を得ば、上に諸佛の求むべきを見ず、下に衆生の度すべきを見ず、佛道を捨てて實際を證せむと欲す。爾の時に若し十方諸佛の神力をして加勸を得ずば、即便滅度して二乗と異なること无けむ。(333) 菩薩若し安樂に往生して阿彌陀佛を見れば即ち此の難無し。是の故に須く畢竟じて平等なりと言ふべし。

復次に『无量壽經』(卷上)の中、阿彌陀如來の本願に言たまはく。「設ひ我佛を得むに、他方佛土の諸の菩薩衆、我が國に來生せば、究竟じて必ず一生補處に至らむ。其の本願の自在にして、化する所の衆生の爲の故に、弘誓の鎧を被て徳本を積累し、一切を度脱して、諸佛の國に遊び菩薩の行を修し十方諸佛如來を供養し、恒沙无量の衆生を開化して无上正眞の道に立せしめむをば除く。常倫に超出し諸地の行を現前し普賢の徳を修習せむ。若し爾らずば正覺を取らじ」と。

此の經を案じて彼の國の菩薩を推するに、或は一地より一地に至らざるべし。十地の階次と言ふは是れ釋迦如來閻浮提に於て一の應化道ならくのみ。他方の淨土は何ぞ必ず此の如くならむ。五種の不思議の中に佛法最も不可思議なり。若し菩薩必ず一地より一地に至て超越の理無しと言はば、未だ敢へて詳かならず。

譬ば樹有り名て好堅と曰ふ、是の樹地より生じて百歳ならむ、乃ち具に一日に長の高さ百丈なるが如し。日に此の如し、百歳の高を計るに、豈に脩松に類せむや。松の生長するを見るに日に寸を過ぎず、彼の好堅を聞て何ぞ能く即日を疑はざらむ。

人有て釋迦如來羅漢を一聽に證し无生を終朝に制するを聞て、是れ接誘の言なり、稱實の説に非ずと謂ふて、此の論事を聞きて亦當に信ぜざるべし。夫れ非常の言は常人の耳に入らず、之を然らずと謂ふ、亦其れ宜しかるべきなり。(解説: 101)

▶略して八句を説きて如來の自利利他の功德莊嚴次第に成就したまへることを示現すと、知るべし。此は云何が次第なる、前の十七句は是れ莊嚴國土功德成就なり。既に國土の相を知ぬ、國土の主を知るべし。是の故に次に佛の莊嚴功德を觀ぜよ。

現代訳:

仏の住持の力をかざる功德(不虛作住持功德)(解説 93)

だれひとり虚しくすぎゆくものがないようにかざりあげられている(仏の)住持(じゅうじ)(の力)の功德とはどのようなものか。偈に「仏の本願力を觀ずるに、遇(もうお)うて空(むな)しく過(す)ぐる者なし、能(よ)く速(すみ)やかに、功德の大法界を満足せしむ」といわれているのがこれである。

むなしくすぎゆくもののない住持(じゅうじ)(の力)が成就しているのは、およそ阿彌陀如來の本願力によるものである。[真 p.316]

いまはまず、むなしい所作(しよさ)の相(すがた)をあげて住持することができないことを示し、それによって彼の(淨土の)むなしい所作なき住持の義(いみ)をあきらかにしよう。[行 p.198]

人は自分の食をさいて子弟を養うまでも、ともすれば舟中で(その子弟に殺されるという)むほんをおこされたり、山のような金が庫(くら)いっぱいあっても餓死することを免(まぬが)れえなかつたりする。このような眼前の事實はすべてこれ(むなしい所作の住持できない相)である。

(自分に)得たことが(いつまでも)得たことを住持することにならず、(いま)在ることが(いつまでも)在ることを守ることにならないというのは、みな虚妄(いつわり)の業で所作して住持することができないということによるのである。

いまいわれているむなしき所作なき住持(の力)とは、本たる法蔵菩薩の四十八願と今日の阿弥陀如来の自在なる神力とによるものである。

願いが力をつくりあげ、力が願いをまっとうさせるのである。願いは徒然なものではない。力は虚設(いつわり)のものではない。力と願いとが相いかなって、いつまでもくいちがうことがないから「成就している」というのである。〔行 p.198-199〕〔真 p.316〕

『解説浄土論註』320 頁(2 如来の本願力の目覚め)(解説 95)

たちどころに彼の(浄土の)仏を見たてまつれば、まだ浄心を証せぬ菩薩も畢竟(かならず)平等なる法身をうることができ、浄心の菩薩と上地の菩薩とに同じく、畢竟(とこしえ)に寂滅平等(の法)を得せしめられるのである。

平等法身とは八地以上の法性(を具現した)生身の菩薩のことである。寂滅平等とはこの法身の菩薩の証した寂滅平等なる法である。(聖全 I p332 往生論註)(解説 96-97) この寂滅平等なる法を得ているから平等法身と名づけるのであり、平等法身の菩薩が得たところのものであるから寂滅平等なる法と名づけるのである。

この菩薩は、報生(ほうしょう)三昧を得て、この三昧の威大な力によって、よく一つ処(ところ)にありながら一念一時のあいだに十方世界に遍じ、すべての諸仏及び諸仏のみもとに海のごとく集まった(菩薩の)大衆をいろいろに供養し、(また)よく無量なる世界の仏法僧の無い処にいたって種種に(三宝を)あらわし、あらゆる衆生を種種に教化し度脱するのである。(しかもこのように)常に仏のいとなみをなしながら、はじめから往ったり来たりするという想い、供養をしようとする想い、度脱しようとする想いが無いのである。だからこのような身を平等法身と名づけ、このような法を寂滅平等の法と名づけるのである。

まだ浄心を証せぬ菩薩とは、初地以上七地までの諸々の菩薩である。この菩薩もまたよく身をあらわして、あるいは百の、あるいは千の、あるいは万の、あるいは億の、あるいは百千万億の仏ましまさぬ国土にいたって仏のいとなみをなすのであるが、(その場合)かならずそうしようという(分別の)心をおこして三昧に入るのである。つまり、なそうとする(分別の)心をおこさないでもよいのではない。なそうとする(分別の)心をおこすから、いまだ浄心を得ずというのである。

この菩薩は、安楽浄土に生れたいと願えば、たちどころに阿弥陀仏を見たてまつる。(そして)阿弥陀仏を見たてまつる時、上地の菩薩と畢竟(とこしえ)に身が等しくなり、(したがって所証の)法も等しくなるのである。龍樹菩薩とかバスバンズ菩薩といった輩(かたがた)が、彼(の浄土)に生れたいと願われたのは、まさしくひとえにこれがためである。〔証 p.285-286〕(解説 97)

問い。『十地(じゅうじ)経』をひもといてみるに、菩薩が上へと進んでいく段階は徐徐なるものであって、はかりしれぬ(修行の)功績をつみ、長い長い時間をかけて、その後にようやくその位を得るのである。どうして阿弥陀仏を見たてまつったその時に、畢竟(とわ)に上地の菩薩たちと身も法も等しくなるというようなことがあるのか。(解説 101)

答え。「畢竟」というのは、ただちに等しいということではない。畢竟じて等しいことが解消されないから「等しい」というにほかならないのである。

問い。もただちに等しくなるのでないなら、またどうしてまわりくどく(上地の)菩薩(と等しい)という必要があるか。(つまり)初地に登りさえすれば、だんだんに前進して、(ついには)自然と仏に等しくなるはずである。(とすれば)どうしてかりにも上地の菩薩と等しいなどと言うに及ぼうか。

答え。菩薩は、七地の中において大寂滅(の境地)を得るのであるが、(その時この菩薩は)上に求むべき諸仏を見ず、下にすくべき衆生を見なくなって、仏への道を捨てて実際(涅槃)に入ろうとする。その時も十方(世界)の諸仏の威大な力によるはげましが得られなかったら、たちまち滅度してしまって、二乗と何らかわりがなくなってしまうのである。(聖全 I p333 往生論註) (しかるに)菩薩がもし安樂国に往生して阿弥陀仏を見たとまつるなら、このような難関は無くなるのである。だから畢竟じて(上地の菩薩と)平等であるという必要があるのである。

さらに次に、『無量寿経』の中の阿弥陀如来の本願(22 願)にいられている。「もし私が仏となるなら、他方の仏土からたくさんの菩薩たちが私の国に生れ来たって、つまるところ必ず(菩薩の究竟位たる)一生補処(ふしよ)に至るであろう。ただ、その菩薩の(特別の)本願によって、おもいのまま衆生を教化しようとし、広大な誓願の鎧を身にまとい、善根功德をつみかさね、すべてのものをすくい、諸仏の国に(ゆぎょう)して菩薩の行を修習(しゅじゅう)して、十方(国土)の諸仏如来を供養し、はかりしれぬ数の衆生を開化して、無上なる正真(さとり)へいたる道に立たしめようとするものはその願いのままにあらしめよう。(これらの菩薩は)常なみの(菩薩の)倫(みち)を超え出(いで)て、諸地の修行をことごとく実現し、普賢(ふげん)(菩薩の大悲の行)の功德を修習するであろう。もしそうでなかったら正覚をとるまい」と。

この『経』(文)をいただいて彼の安樂国の菩薩についておもうに、おそらく一地より一地へと進むのではあるまい。十地の階位というのは、釈迦如来がこの人間世界にしめされた一つの応化(てだて、おうけ)の道にほかならないのである。他方の浄土が必ずしもそのとおりである必要はない。(そもそも)五種の不思議の中で(弥陀の本願を説く)仏法は最も不可思議なるものである。もし「菩薩は必ず一地より一地へと進むものであって、それを一気にとびこえるなどという道理はないのだ」と言うなら、それはまだ(仏法の不可思議なることを)くわしく知らないのである

たとえば好堅(こうけん)という名の樹がある。この樹は地(中)で百歳(の年月を)かけて(枝や葉を)ことごとくつけ、(地上に出るやいなや)一日で高さ百丈に成長する。日日このように成長して百歳になったときの高さを計るなら、どんなにたけの高い松でもおよぶはずはない。松の生長するのをみれば、一日せいぜい一寸たらずである。(そんな常識で)彼の好堅のことを聞けば、たちまち日に百丈のびるなどとは、どうしても疑わずにはおれないであろう。

人あって、釈迦如来が一度(たび)聴かすだけで(ある人に)阿羅漢をさとらせ、(また)ごく短い時間にくらくと無性法忍をえさしめたということを聞いて、これは(凡夫を仏道に)いざなう言(ことば)であって、真実になかった説ではないといっている。(このような人は)この浄土論の説事を聞いてもまた信じないであろう。(そもそも)非常の言(ことば)というものは常人の耳には入らないものであって、この論をまちがっているというのもまた仕方のないことであろう。〔証 p.286-287〕(解説 103)

真宗聖教全書(三經七祖部) 浄土論註下巻:不虛作住持功德 (331)発表 原稿 #2.

不虛作住持功德 2025.9. 教師会研修会 田畑担当

第九章 本願力の開建顕 (『浄土論註』の思想究明…親鸞の視点から…延塚知道著平成 20 年 5 月)

1. 不虛作住持功德(p202)

「願生偈」における浄土の二十九種莊嚴の中で、「觀」という字で始まる功德が二つある。それは清浄功德と不虛作住持功德の二つである。

清浄功德は、すでに尋ねたように、二十九種莊嚴の総相として説かれており、下巻では

此れ云何ぞ不思議なるや。凡夫人の煩惱成就せる有りて、亦彼の浄土に生ずることを得れば、三界の繫業、畢竟じて牽かず。則ち是れ煩惱を断ぜずして涅槃分を得。焉んぞ思議すべきや。」(東 282-283 東 2-322-323)

と、浄土の全体が涅槃界であると説かれる。したがって凡夫の願生道は、そのまま大般涅槃道であることが示唆されている。またその浄土に煩惱成就の凡夫が願生すれば、「三界の繫業畢竟じて牽かず」と説かれ、八番問答の三在釈と見事に重なっていて、浄土が衆生の回心に開かれる境界であることが示されている。

しかし、願生道が回心に始まる涅槃道であることを言おうとするだけなら、国土の十七種莊嚴だけで事足りる。もともと国土の十七種莊嚴の中に主功德として仏莊嚴も説かれており、眷属功德や大義門功德として菩薩功德も説かれている。それにも関わらず、なぜ仏莊嚴八種と菩薩功德四種が別に開かれなければならなかったのであろうか。

下巻の觀察躰相章が始まる場所に、曇鸞は次のように注釈している。(解説浄土論註下巻p. 26)

(五念門第四の觀察門)觀察(かんざつ)体相は、この分の中に二つの体(すがた)がある。一には器の体(すがた)、二には衆生の体(すがた)である。器(を觀察する)分の中がまた三重になっている。一には、国土の体(すがた)をあかし、二には、(その国土の莊嚴が、如来の)自利利他(の功德)をしめしあわす(ことをあかし)、三つには、(その国土の莊嚴が)第一義諦(法性)にかなう(ことをあかす)のである。

このように国土莊嚴には三重の意義がある。一つの目は国土の働きとその働きが何に依っているかを分かるように表現することである。二つ目は衆生に自利利他を成就すること、さらに三つ目は衆生を大般涅槃道に立たしめることである。それに続いて曇鸞は、

どのように彼の仏国土の莊嚴(しょうごん)の功德を觀察(かんざつ)するのか。それは、彼の仏国土の莊嚴(しょうごん)が、不可思議なる力を完成(持続)しているからであって、(解説浄土論註下巻p. 26)

と云い、その不可思議力について五つの不可思議力をあげる。その五つ目に、(解説浄土論註下巻p. 27)

五つには仏法力不可思議なり。この中に仏土不可思議に二種の力あり。一つには業力、謂わく法蔵菩薩の出世の善根と大願業力の所成なり。二つには正覺の阿弥陀法王の善く住持力をして撰したまうところなり。」ここに不可思議というは、下の十七種のごとき、(東 315)

と、国土の体となる二つの働き、即ち「法蔵菩薩の出世の善根と、大願業力」と「正覺の阿弥陀法王善住持力」とを示す。この二つの働きこそ、国土十七種莊嚴の全体を貫く働きである。そしてこの働きは、特に『論

註』下巻の不虛作住持功德積に説かれている。

言う所の不虛作住持は、本、法蔵菩薩の四十八願と、今日、阿弥陀如来の自在神力とに依る。(東 198-9)

このことから分かるように、願生する者に自利利他を成就しながら、大般涅槃道に立たしめる国土の莊嚴功德の根源力(本願力)とその道理を示すために、仏莊嚴・菩薩莊嚴を開かなければならなかったのである。要するに、なぜ「一切外道凡夫人」に浄土が開かれるのか、その根源力と道理は何か、それは国土莊嚴だけでは明らかにならない。だから敢えて仏莊嚴・菩薩莊嚴を別開して、本願の道理を明らかに教えるのである。したがって、その中心となるのは「不虛作住持功德」であり、したがって天親は、総相の清浄功德と同様に「観」を冠して、ここに中心があることを明示しようとしたのである。おそらくこれが、曇鸞の二十九種莊嚴に対する基本的な了解であろう。

では不虛作住持功德について尋ねることにしたい。

「観仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海」(仏の本願力を観ずるに、もうおうてむなくすぐるひとなし。よくすみやかに功德の大宝海を満足せしむ)(東 137, 東 543, 東二 666)。

これが「願生偈」の不虛作住持功德の偈頌である。「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安楽国」と表明して願生浄土の仏道に立った天親に、広大な如来の無上涅槃の功德が、溢れるようにその身に満ちてくる感動が表現されている。ここに仏道の成就である「見仏」が説かれ、大乘菩薩道の難関である七地沈空の難を超えて、任運無功用に利他行を果たすことができる菩薩が生まれてくる根拠が明らかにされている。したがってこの偈文は、人間の歴史の中で『大経』の真理性を証した、歴史的な証文という重要な意義を持っている。

さて曇鸞は下巻の不虛作住持功德積で、

「即ち彼の仏を見れば、未証浄心の菩薩、畢竟じて平等法身を得証す。浄心の菩薩と、上地のもろもろの菩薩と、畢竟じて同じく寂滅平等を得しむるがゆえに」とのたまえり。(東 285L5)

と言う天親は「論」の文を次のように注釈している。

「平等法身」とは、八地已上の法性生身の菩薩なり。(東 285-6)
(「寂滅平等」とはすなわちこの法身の菩薩の所証の)寂滅平等の法なり。この寂滅平等の法を得るをもつてのゆえに、名づけて「平等法身」とす。平等法身の菩薩の所得なるをもつてのゆえに、名づけて「寂滅平等の法」とするなり。この菩薩は報生三昧を得。三昧神力をもつて、よく一処、一念、一時に十方世界に遍じて、種種に一切諸仏および諸仏大会衆海を供養す。よく無量世界に仏法僧ましまさぬところにして、種種に示現し、種種に一切衆生を教化し度脱して、常に仏事を作す。初めに往来の想・供養の想・度脱の想なし。このゆえにこの身を名づけて「平等法身」とす。この法を名づけて「寂滅平等の法」とす。)

「未証浄心の菩薩」とは、初地已上七地以還のもろもろの菩薩なり。この菩薩、またよく身を現すること、もしは百、もしは千、もしは万、もしは億、もしは百千万億、無仏の国土にして仏事を施作す。かならず心を作して三昧に入りて、いましよく作心せざるにあらず。作心をもつてのゆえに、名づけて「未証浄心」とす。この菩薩、安楽浄土に生まれて、すなわち阿弥陀仏を見んと願ず。阿弥陀仏を見るとき、上地のもろもろの菩薩と、畢竟じて身等しく法等し、

このように曇鸞は、未証浄心の菩薩が浄土を願生し見仏しようとするのは、佐心を超えるためであると説く。また

菩薩七地の中にして大寂滅を得れば、上に諸仏の求むべきを見ず、下に衆生の度すべきを見ず。仏道を捨てて實際を証せんとす。その時にもし十方諸仏の神力加勸を得ずは、すなわち滅度して二乗と異なけん。菩薩もし安樂に往生して阿弥陀仏を見たまつるに、すなわちこの難なけん。(東 286)

とも言い、七地沈空の難を超えるために見仏すると説く。七地沈空とは、教化すべき衆生も菩薩自身も一切が空であるという空見に沈んで、上求菩提下化衆生という仏道を忘れて涅槃に入ろうとする七地の菩薩の陥る危機のことである。そしてした「未証浄心の菩薩」は、「上地の諸の菩薩と畢竟じて身等しく法等しくなり、任運無功用の普賢行を行じていく、と言う。つまり曇鸞は、菩薩の佐心を超えるため七地沈空の難を超えるという二つの課題を超克するために、浄土での阿弥陀如来の見仏がると言うのである。

ところが「十地経」では、七地沈空に沈んだ菩薩が諸仏の七勸を受けて見仏し、再び仏道に立った地を第八地とする。ここに諸仏の七勸が説かれるのは、七地沈空が菩薩の自力では超えられない難関を示すと同時に、七地の菩薩の自力の限界を明らかにしているからである。さらに「智度論」では、七地の菩薩が超えねばならない作心が造作分別心と説かれる。この造作分別心とは、煩惱のことである。したがってここでは、あらゆる煩惱に打ち勝った七地の菩薩が、菩薩であることを全うしようとして行じる作心が、最後に残ったたった一つの煩惱である、と言うのである。この作心は七地の菩薩が自力では克服できない煩惱といえよう。なぜなら七地の菩薩が、衆生を教化しようとする作心を捨ててしまえば菩薩であることを放棄することとなり、反対に菩薩であろうとすればどこまでも衆生を教化することが課題となり、作心を捨てることはできないからである。このことから分かるように、作心も「十方諸仏の加勸」に依らなければ超えることができない七地沈空も、どちらも七地の菩薩の自力の限界を示すものである。

だから、この自力に依るしか在りようのない存在を決定的に覚知せしめられるのが、この不虛作住持功德に説かれる阿弥陀如来の見仏ではなかろうか。まったく煩惱の穢れない阿弥陀仏に見えることによって如来とは決定的に異質な自らの煩惱の身を覚知せしめられるのである。ここに、菩薩十地という煩惱を段階的に減らしていく量的な思考の仏道から、煩惱が一つであろうが煩惱成就の凡夫であろうが、仏ではないという意味では「同質であることを決定せしめられる他力の仏道への転換がある。曇鸞はそれを、「常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん」という『大経』の一生補処の本願文を引用して

此の『経』を案じて彼の国の菩薩を推するに、或いは一地より一地に至らざるべし。「十地の階次」と言うは是れ、釈迦如来、閻浮提にして一の応化道ならくのみと。他方の浄土は、何ぞ必ず此くの如くせん。五種の不思議の中に仏法最不可思議なり。若し、菩薩、必ず一地より一地に至りて、超越の理無しと言わば、未だ敢えて詳らかならざるなり。(東 286-7)

と言う。このように曇鸞は、菩薩道の十地の階次は釈迦如来の方便であって、仏道の実践において本願の超越の道理が分からなければ、その人には、ついに仏道は分からないことになる、とまで言う。ここに曇鸞が、凡夫にこそ開かれる他力の仏道を明らかにしようとする根拠があるのである。

さて、諸仏の七勸によって阿弥陀如来の見仏を成就した八地の菩薩は煩惱の穢れない阿弥陀如来に帰命して、測ることのできない仏の智慧の涯底なき深さを知らされることになる。したがって必然的に「種々に一切諸仏及び諸仏の大会衆海を供養」と言うように、諸仏供養をせしめられて平等心を獲得する。したがって「仏願に乗ずるを我が命と為す」という菩薩は

東 117

能く無量世界の仏法崇ましまさぬところにおいて、種々二次元氏種々に一切衆生をおしかし脱して常に仏事を尽くせども初より往来の想・供養の想・度脱の想なし(『聖全』一・332L3)

と言うように、遊ぶが如くに衆生を教化することができる者になるのである。このような普賢行は、浄土の菩薩王莊嚴に次のように説かれる。

八地以上の菩薩は、常に三昧の境地にあり、その三昧の力によって、身はもとのところから動かないですべての世界に至り、仏がたを供養し、衆生を教え導く。(東聖典 288)

浄土の菩薩莊嚴は、阿弥陀如来の不虛作住持功德を基点とし、そこから展開されたものである。したがってこの菩薩が普賢の徳を行ヅルその根源力は、阿弥陀如来の不虛作住持力であることは言うまでもない。

すでに尋ねたように、衆生の願生心として働く真実功德相の働きは、浄土の二十九種莊嚴の働きであり、その中心は阿弥陀如来の不虛作住持功德であった。この不虛作住持功德の見仏の文と此土の衆生の讚嘆門の回心の文とが重なって説かれていたように、願生心に浄土の菩薩の功德、即ち一切衆生への平等心と如来への供養心をそのまま賜るからこそ、衆生に機の深信(平等心)と法の深信(如来への供養心)を内に包んだ回心が起こるのである。

しかし考えてみれば、浄土での出来事出遇ってしかも大乘菩薩道の七地沈空の難を超えるという壮大な菩薩道の課題と、この世での凡夫の回心とは本来は無関係である。その無関係である浄土での菩薩の見仏が、この世の凡夫の回心に影を落とす、その道理を阿弥陀如来の本願力と仏力に見出したのが曇鸞である。第六章で述べたように、觀察門の彼土行の不虛作住持功德の文と讚嘆門の此土行の回心の文とが重層して説かれているのは、このような本願の道理を、曇鸞がその背景に感得していたからである。

言うまでもなく、機の深信は、煩惱の身を覚知せしめられた「普共諸衆生」(平等心)という大乘の知見である。また、法の深信は、深広無涯底なる如来(諸仏供養)の智慧海を感得しているのだから、これもまた大乘の知見である。したがってそこに八地の菩薩の阿毘跋致の功德を賜って、凡夫のままで現生に正定聚に住する。要するに我々の願生心は、壮大な大乘菩薩道の修行の階梯を背景としているのであって、だからこそ一切の衆生と共(平等心)に、阿弥陀如来の覚りの世界(諸仏供養)である無上涅槃に、必ず極まり至る(現生正定聚)という確信を得るのである。より体験的に言えば、身は凡夫であっても我々の願生心には、如来の智慧海に証されている無上涅槃の功德が「能令速」という能動性をもって溢れるように感得されるのである。おそらく親鸞も、仏道に立った感動の根拠が、如来の無上涅槃の功德であることを、この天親の不虛作住持功德の偈文に教えられたのであろう。「深広無涯底」の如来の智慧海はあまりにも深く、そこに凡夫であろうが浄土の菩薩であろうが煩惱の身で在ることにかかわりないと知らされて、尽十方無碍光如来への一心帰命が決定されるのである。

だから『入出二門偈』で親鸞は、穢土と浄土の境界を突破し凡夫と菩薩との境界をも超えて、浄土の不虛作住持功德の偈文であるにもかかわらず「凡愚遇無空過者」と、凡愚という主体を加えて大胆な読みをしたのだと思われる。これが曇鸞が二道積で、易行道を「信仏の因縁」に依る仏道と宣言し、その主体を菩薩から「一切外道凡夫人」へ、「阿毘跋致」を「正定聚」へ見定めたことと別なことではない、と確信するものである。

延塚知道師:不虛作住持功德について「仏に成ることが決定する不虛作住持とは、因の法蔵菩薩の本願力の働きと、果の尽十方無碍光如来(仏力)の覚りの働きによるのである。凡夫として因の本願に帰すれば、そのまま果の涅槃の覚りに包まれる。果の覚りに包まれてみれば、法蔵菩薩の因のご苦勞に頭が下がる。因の本願力もいたずら事ではなく、果の仏力も虚しく設けられものではない。因力も果力も、お互いに成就し合ってたがえることがないから、本願の成就というのである。」

曇鸞は他力の仏道の原理を、因の本願力と果の仏力に見出して、七祖の中で初めて公にしたのです。

真宗聖教全書(三經七祖部) 浄土論註下巻:不虛作住持功德 (331)発表 原稿 #3.

不虛作住持功德(ふこさじゅうじくどく):

#0. 仏のはたらきは眞実にしてすべてのものを保持するものであることを明かす。また云わく、「何者が莊嚴不虛作住持功德成就。「偈」に「觀仏本願力 遇無空過者 能令速満足 功德大宝海」(仏の本願力を觀ずるに、遇うて空しく過ぐる者なし、よく速やかに功德の大宝海を満足せしむる)がゆえにこと言えり)(浄土論、東聖典 137, 島地聖典 8-14)。

「不虛作住持功德成就」は、蓋しこれ阿弥陀如来の本願力なり。乃至 言うところの不虛作住持は、本(もと)法蔵菩薩の四十八願と、今日の阿弥陀如来の自在神力とに依ってなり。願もって力を成ず、力もって願に就(つ)く。願徒然ならず、力虚設(こせつ)ならず。力・願あい符(かな)うて畢竟じて差わず。かるがゆえに成就と曰う、と。(西注釈版 197、東聖典 198。西注釈版 361, 東聖典 316、島地聖典 12-45、12-151) という阿弥陀如来の本願力成就を示す文であった。親鸞は本願力に出遇(あ)って、空過の人生が仏果を得る功德の人生に轉換されたことを慶ばれて、

本願力にあひぬれば むなしくすぐるひとぞなき 功德の宝海みちみちて 煩惱の濁水へだてなし
(西注釈版 580、東聖典 490、島地聖典 11-24)

#1. 講解教行信證、真仏土の巻、法蔵館、星野元豊著p1540

不虛作住持功德成就というのは、一口に言えば、つまり阿弥陀如来の本願力のことをいうのである。(中略)いま不虛作住持(決して無駄事ではなく、しっかりと阿弥陀如来が住持して下さるということ)ということとは、そのもとを辿ってみれば、

因位の法蔵菩薩が 48 願を起こして、五劫の思惟と修行の結果、願が成就して、今日、浄土が建立され、法蔵は浄土の主、阿弥陀仏として一切衆生救済のはたらきを自在に働いていて下さるのである

考えてみれば、法蔵の本願(因)が今日の阿弥陀如来の不可思議の力(果)をもたらしたのである。今日の如来の救済力(果の内容)こそ 48 願の一つ一つを満足せしめるはたらきをしているのである。

まことに願はいたずらでなかった。むだではなかった。この願によって今日のこのような如来と浄土のはたらきが実現しているのである。

因位の願が如来のはたらきを生み、如来のはたらきはこの願を離れてあるのではない。如来の救いのはたらきは今日この私の上に現にはたらいているのではないか。如来の神力は決していつわりではなかったのである。

因位法蔵の願といま現に私の上にはたらいている如来の神力と会い違ふことなく、ぴったりと一つになって、凡夫救済が完成されているのである。まさに不虛作住持功德は成就しているというべきであろう。

#2. 「我われの体験から言えば、助けんというのが仏の願心であるが、その助けんという願心にふれたところを我々の自覚として表せば、もう助からんでもよいという願が出てくることでなかろうか。すなわち「勿体ない」ということが出てくるのである。助けんという如来の大きな御心に目覚めてみれば、どうしても助けて貰わなければならぬというような厚かましきはなくなり、助けて貰わなければならぬという心は撤回されるのである。そこに、地獄に落ちてても後悔しないという心が出てくる。それが助かったということ

である。助けんという願に助けられたのである。助けんという願が成就してから、助かるというようなことではない。本当に助けんという願に目覚めれば、もう助かったのである(仏の大きな慈悲心に触れて仏へのお任せになっていく)。それが仏の願(因)が願自身を成就している(果)ことである。因に果を成就していることである(因が縁に触れて働きを起し、目覚めの結果に至る)。

#3. 仏本願力を分けて仏力と本願力にせられた。(曇鸞大師)(安田理深、「願生浄土」p229)

天親菩薩の浄土論の特色は、国土莊嚴から衆生世間莊嚴を開かれたところにあるが、何のためかという不虛作住持功德を明らかにするためである。

「観仏本願力」は浄土論の根底である。また三部経の根底であり仏道の根底である。仏道の根底そのものが仏本願力で、それによって浄土が成り立つ。つまり仏道の事業の行われる場所である。

曇鸞大師は仏本願力を分けて、仏力と本願力にせられた。本は因本、仏力は光明である。光明威神力である。仏力も本願も智慧である。智慧によって生まれ、智慧によって統理されている世界である。二つに分けて解釈されるのはそれによる交互的であることが明らかにされたのである。

「願もって力を成ず。力もって願につく。願徒然(とぜん)ならず。力虚説(こせつ)ならず。力願あいかのうて、畢竟差(たが)はず。ゆえに成就という」(願は力を成り立たせ、力は願にもとづいている。願は無駄に終わることなく、力は目的なく空転することはない。果位の力と因位の願とが合致して、少しも食い違いが無いから成就というのである)

仏本願は力を成じ、仏力が本願に就く。仏願力が国土を成就しているのである。

つまり本願が本願を証明している。空しくない。それを不虛作住持と言う。不虛作故に仏力住持が成り立つのである。如来の本願を見出さぬと住持はない。本願が本願自身を証明するのである。人間の世界は足らぬ時他力で補おうとする。他力で力を得て努力するのであるが、本願に触れると、触れたことが満足である。願が成就して救われるのではなく、本願に触れたことが成就である。そこに満足がある。

浄土論がすでに、願が願自身を満足している。自体に満足している。それを浄土というのである。願が力を成じ、力により願を完成するのである。

縁起をはなれると交互でない。交互は果が大事である。普通果は因の結果であって、因の終わりである：法性法身から方便法身(南無阿弥陀仏)となって働きかける)

ところがその因の終わりの結果の中に、新しく、終わるところに初めを見出したのである。終わりこそ初めである。(従果向因：凡夫を悲しみ、阿弥陀仏を讃嘆して) だから因が成就したのが果、それと共に、果が因を成就する。因が成就するのが果、因の成満である。また因を成満するという二意がある。

因縁の道理によって釈尊が仏に成られた。それはまた我らを仏ならしめる道理である。因縁を見出したのが仏法である。これが第一義諦である(縁起の法)。

#4. 宮城顛選集17. 浄土論註聞記Ⅱ. 不虛作住持功德は29種莊嚴の中の根本

この不虛作住持功德は仏8種莊嚴の中の一番最後にあげられているわけですが、じつは、この不虛作住持功德が、この29種莊嚴の中の根本でありまして、器世間17種、そして不虛作住持功德の前の仏7種の全体をおさめる偈文です。そして、この不虛作住持功德いわばおのずからなるはたらきとして、このあと菩薩四種功德が展開されてくるわけです。

#5. 安田理深「願生浄土」(p237) 人間には真実も不実もあるのでない。人間にあるのは不実である。真実は如来だけにあることである。如来の上にはじめて真実ということが出来る。我々に真実があると思うから真実を見逃すのである。それで如来即ち真実とある。如は真、来は実。、如は不顛倒、来は不虚偽。不顛倒は法について、不虚偽は衆生に着くのである。法性にかなうは不顛倒、衆生を欺(あざむ)かぬが不虚偽である。こういう定義は誰にも出来ることではない。殊に、真にしてかつ実であることが明確に定義されている。

一如にかなう。一如の法性にかなうところに真がある。仏法の真実を世間の真実であらわすことはできない。何が本当か何が嘘か。その価値を仏道において標準が見いだされなければならぬ。ある意味からは価値の転換である。そうでないと、仏法に触れたのとは変わらぬことになる。過失についても罪悪についても、自覚に相応して罪が認識される。世間の罪をもって仏教の罪を言うことはできない。仏法においては本願を疑うことが罪が一番重い、世間では罪ではない。このように、価値は自覚に応じて転換が起こるのである。

#6. 浄土真宗をたてるp240

とにかく、不虚作住持功德にそれほど重要な位置を与えられたのである。それはただ直観せられたものでない。大体曇鸞大師は、大無量寿経の歴史的展開として浄土論も十住毘婆沙論もみられる。浄土論によって大無量寿経の精神を明らかにするが、また大無量寿経によって浄土論を明らかにするのである。

そうすると浄土論は、大無量寿経に説かれる本願成就を述べられたものである。天親菩薩の願生は本願成就の一心の内容である。一心といい、願生とある。願生の一心、一心の内容を願生という。こういう所なら見ると、一心帰命は本願成就の信心を表白せられたのである。あの一心は大無量寿経の「聞其名号信心歡喜乃至一念」、つまり本願成就をいただかれた一心である。一心は本願の欲生心を呼び覚まされた一心なる故に願生、それを表白されたから一心である。浄土論は天親菩薩の信心の表白であるが、ただ漠然としてでなく、本願力回向の信である。天親菩薩自身が、身を以って体験された本願成就のお言葉である。

そこから浄土論をみると、初めの二行の偈文と正説の不虚作住持との三偈によって、本願成就の意義が尽くされているということが出来る。その意味で親鸞はこの三偈で願生偈をおさえられる。願生偈は本願成就の信の表白である。この三行の偈をおさえると、経文の本願成就の意がはっきりしてくるのである。

本願成就は大事なことで、親鸞が本願成就の経文を重要にご覧になった。本願成就の経文によって大無量寿経の真実の教えである意義を見出された。この真実の教によって浄土真宗を開かれたのである。真実の教行信証を見出されたのである。真実の教行信証とは本願成就としての教行信証である。浄土真宗は本願成就がわかればよい。法然上人はどちらかというと本願に立場がある。しかし、本願というところだけでは完成できないのである。法然上人は、実践は観無量寿経が立場であるから、立教開宗はせいぜい聖道門に対して浄土門ということしかない。真実と言うことしか出てこない。真宗仏法の真宗で一つしかない。親鸞は法然上人の事業を完成するために浄土真宗を立てられ、教行信証を御制作になった。それは本願というだけではないのである。本願は第 18 願であるが、第18願はどれだけみても現生不退は

見出せぬ。本願だけでは未来往生になるのである。現生の救いは聖道門、未来の救いは浄土門といわれるが、聖道門からは本当の意味の現在に生まれてこぬ。現在の救い、現在を見出すところに真宗があり、親鸞の大無量寿経下巻本願成就文の中に、現生不退を見出された。本願成就の自覚の如何によって、真宗の興廃を決する問題はここにある。法然上人は観無量寿経を通して大無量寿経をみられたが、親鸞は本願成就に立って教えて下さるのである。このことが明瞭になっているかいないかである。真実かどうかともこれによって決まるのである。

#7. (p246 後ろ5行) 本願成就の一念の信は南無阿弥陀仏を至心廻向された一心である。それで、信の一念のところに願が満足するから「即得往生住不退転」である。住不退転は願の満足である。「即」が信ずる時、信ずる時が願が満足する時、信ずる時救いが成り立つのである。信を獲た時、全部終わる。我らの一生の大事が終わるのである。また仏法の大事業もそこに完成するのである。(中略)

「即得往生住不退転」(p247)は本願成就の文である。これは大無量寿経の言葉で、そこに自ら、浄土論に大無量寿経の成就文を移せば、浄土論の序文の二偈は本願成就の信心を表わすのである。一心は不二、純一無雑の心、一心は時である、万劫の初事としての信心。経と論と相応じてあらわされる感動の言葉である。得ようとして得た信ではない、信を頂くのは私の都合ではない。他力廻向の信心は無始以来の仏法の歴史が完成したのである。無始以来の苦勞の歴史は南無阿弥陀仏の仏言を頂き、信を獲得した今日をあらしめるためにである。自力の信心には時がない。個人的各別の信心である。時において開かれる唯一無二の心であると浄土論はあらわすのである。p247 (中略)

一心に帰命すれば、南無阿弥陀仏の中に本来あったことを自覚する。そこに衆生の願は即得往生する。これは、如来の名号を以って欲生心を廻向する故に、一念の信の時に願は満足する。その満足の内容が29種莊嚴功德である。往相・還相の廻向に依りて自利利他満足の仏道である。南無阿弥陀仏を体として、信樂と欲生が語られる。

#8. 道理にかなうp248

「能令速満足」ということは他力を表わす。本願力なる故に速かに得ることを表わすのである。仏本願力を観ずれば、観じた者の上に本願力が速かに満足成就してくる。それが廻向である。本願に帰すると、帰した本願が帰して者の上に速満足する。そこに、宿業の身が大般涅槃を満足すると共に、大般涅槃が満足するのである。自力の信を振り捨てて仏本願力に帰すると、帰した本願が帰した身に満足する。浄土論には誰が本願に遇うというてはないが、大無量寿経の成就の文には諸有の衆生だけが遇うといことができる。親鸞は入出二門偈に「観彼如来本願力 凡愚遇無空過者」と凡愚をつけられて、遇うのは我ら凡愚だけが本願に遇うものだと仰せられる。遇うということのあるのは凡夫だけである。本願は遇うもの、向こうは見つけているが、我らが気が付かない。本願を起こされた時より、本願は我々を呼びかけているのである。向こうは見つけているが、我らが気が付かない。遇ってみれば、本願を起こされた時より、本願は我々を呼びかけているのである。現在の私が本願に遇うことにより、本願を起こされた初めに帰り、本願を起こされた久遠の初めが、はじめて私の今日成就されたのである。その本願の一心に帰るのである。